

青丘文庫研究会 月報

No.268

2013年5月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西部会 (代表・飛田雄一)
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000 円
 ※ 他に、青丘文庫に寄付する図書の購入費として 2000 円/年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

索引づくり

小野 容恵



先日、私の初めての単著である『朝鮮独立運動と東アジア 1910-1925』を思文閣出版から刊行した。簡単に内容紹介をしておくと、韓国併合直後から 1925 年までの民族運動、独立運動の展開過程を、朝鮮内と日本における運動を中心に、同時代の東アジア諸国との関連性に着目しながら論じたものであり、やたらと日本人や中国人の名前が登場するのが特徴になっている。在日朝鮮人運動史研究会との関連だと、最後の第六章が在日朝鮮人運動を扱ったものであり、1922 年に組織された共産主義団体の北星会の結成、活動、解散の経緯や金若水らの活動については、拙著によってかなり明瞭になったのではないかとと思っている。

さて、拙著は本論が全六章で、その他、付録や参考文献、そして索引などで構成されている。いずれも、それなりに苦労して執筆したものだが、私自身が最も愛着を持っているのは、真剣に読んでくれる人など皆無であろう索引の部分である。

どの項目を索引に採録するかというのは著者にしか判断できないと思い、誰にも協力を求めずに全て一人で行おうとしたのが間違いだったのかもしれないのだが、実は索引作成こそが本書の原稿を作るうえで最も苦労した部分であった。全 400 ページのゲラを何度も見返して、採録しようとしている項を探すといった単純作業も十分に面倒なのだが、案外頭を使う作業も多い。例えば、「三・一運動」という項をゲラから拾い上げると 200 回以上登場する。それを全て採録するとページ番号ばかりになるし、何よりも分かりづらいので、そのなかから「三・一運動以前、以降」といった時期区分用語として使われているものを省く。こういった具体的に、採録する人名・項目をゲラのなかから探し出す単純作業と、探し出した後に選別する（そこそこ）頭を使う作業の繰り返しで、索引作成は実に骨の折れる作業であった。さらに、校正の過程で本文のページ数も多少ずれるので、最終的には索引の全項目のページ数チェックもしなければならない。この作業だけでも数十時間かかった。

私はこれまで、誰かの研究書を読む際は、あとがき→目次→参考文献→脚注→本文の順で読んでいたが、これからは索引にじっくりと目を通してから本文を読もうと思っている。

第286回朝鮮近現代史研究会 (2013年2月10日)

韓国・済陵島(獨島上陸不能)旅行記

坂本悠一

本報告の当日のテーマは「竹島＝独島領有問題を考える」というものであった。その後半部分にあたる「研究の現段階」では、池内敏の近著『竹島問題とは何か』(名古屋大学出版会.2012.12)の



内容を紹介した。しかし、これについては近日中に別の研究会で報告予定です。すでに原稿化しているが、分量的に本月報に載せることができない。そこで、今回は当日省略した前半の表記「旅行記」について、まとめてみたい。

そもそも報告者は、1999年以降50回以上に涉って韓国全土を踏破しているが、資料収集以外は、専ら「乗り鉄」つまり Korail の列車に乗ることが目的であった。したがって済州島に2回行ったきりで、rail のない島嶼部にはほとんど関心がなかった。また、植民地支配にかんしては、領土という土地の問題よりも、いわゆる「慰安婦」「強制動員」など、まだ生存者のいる人の問題を重視し、微力ながらその補償運動にも協力してきたという経緯があった。今回の「平成竹島一件」とでもいう紛争の引き金は、言うまでもなく昨年8月10日の李明博韓国大統領の獨島初上陸であり、これにたいする日本政府や各政党、とりわけ野党である共産党や社民党の対応に少なからぬ危惧を覚えたからに他ならない。そこで、『むくげ通信』の飛田論考などを指針に、国内で手に入る各種文献にあたってみたが、どうも「どちらもどっち」といった感じで腑に落ちない。そんな折り、韓国のプサン 친구である崔永鎬氏(靈山大学校)と偶然 facebook で交信し、獨島行が可能かどうか尋ねてみたところ、プサンの旅行社が主催する団体ツアーがあり、1泊2日往復20万ウォン程度だという。私の都合でLCC(格安航空社)の予約が遅れたので、日本海=東海の初冬にずれ込み、結局上陸できないという結果になってしまったのは、まことに残念である。

以下旅程順に概略と、感想を述べる。第1日は、11月18日(日)大阪関西APを10:40に出発するLCCのAir Busan(BX123)に搭乗し、釜山金海APに12:10到着、崔氏の出迎えを受ける。ここからはtaxiに乗って、Korail釜山駅に向かい昼食後、同駅14:10発のKTX144列車で東大邱駅に14:57到着。同駅で乗り換え15:15発の早弓 1759列車で浦項駅に15:15に到着した。市内散策や翌日に備えての旅客船ターミナルの下見を終えた後、港近くのMotelにて宿泊、広いオンドルパンで、彼氏と同室(同食ではない!)。

翌19日(月)は、私の嗜好でAmerican Breakfastの後、浦項港ターミナルに向かう。予約済なので乗船券は問題なく手に入ったが、ここでまず最初の関門に直面した。10:00発の鬱陵島行の乗船が開始されたが、なんと私一人だけ係員に呼び止められ、別室に連行される。そこは海洋警察の詰所であり、数名の警官から「どんな目的で我國獨島に行かれるのですか?」と丁重な韓国語で質問いや尋問される。私はおもむろに名刺を差し出し「純粋な学術研究のためです」と片言の韓国語で対応し、同席した崔氏が補足説明をしてくれる。それで、ようやく乗船許可となり、大型客船は定刻に出港する。ところが、この日はあいにくと言うか初冬の東海には珍しくなく、猛烈な高波で船は動揺収まらず、鬱陵島の五等港には予定より2時間近く延着し14:50に到着。当日宿泊予定のMotelにて昼食が出たが、船酔いのためモヤシスープに手を付けた程度。本来の旅程では当日午後には獨島行の遊覧船に乗って念願の獨島上陸を果たすはずであった。欠航だということから残念だが仕方ない。charterされた観光busに乗って鬱陵島南西部を周遊することになる。しかし、天候のせいか展望台より獨島は目視不能で、近傍の「竹嶼」と「観音島」のみを写真に納めた。ちなみに、日本側の有力な見解では、前者が「竹島」であり、後者が問題の「石島」にあたるという。この日は島の「繁華街」にある五等のMotelで美味しくないと夕食、気晴らしのため久しぶりに二人で노래방に出かけ、私は「아침이슬」を熱唱した。この夜も崔氏とMotelの狭いオンドルパンで同宿。

翌20日(火)、Motelの朝食はご飯のみなので、私は近くの편의점でパンを買ってしのぐ。本来のツアーではこの日は、観光busによる鬱陵島中心部巡検であるが、私たちは離団して別行動を取ることにした。ところが、Motel前にはなんと1台のパトカーが待機している。地元鬱陵警察署の警官1名が、「私のご案内いたします。どうぞお乗りください」とのこと。まるでVIP待遇の「護衛?」付観光とあいなった。仕方なくtaxi代わりに利用するしかない。まず郡庁を訪ねたいと言ったが、獨島の管理は専ら「獨島管理事務所」なるお役所があるとのこと。そこに案内され所長に面会、湯茶のもてなしを受け、非売品の豪華な写真集を贈呈された。次は、「獨島博物館」に向かい、警官の随伴のためか無料で入場。大仕掛けな展示を駆け足で見て回る。朝鮮時代の地図で、「于山島」が鬱陵島よりも西側つまり半島寄りに描かれているのは既に承知していたので、別段驚きはしなかった。ただ、問題の1905年2月島根県編入に当たっての説明に、「韓国政府には通告せず、国内でも県告示という形で内密に処理された」とあり、居合わせた学芸員に「地方新聞では報道されている」

と詰問したところ、彼氏はニタツとして「その事実についてはもちろん承知しております」との冷ややかな返事のみ。水掛け論に終わりそうなので、矛を収めた。ついで、すぐ近くにある ropeway に、これも無料で乗り込み、標高約 200m 位の展望台に向かう。昨日よりは天候も良くより高所なので大いに期待するもむなしく、獨島は望遠鏡でも目視不能であった。ここで初めて日本人と会ったが、ソウル在住の私と同年齢とおぼしき男性で、日本語の達者な韓国人男性と一緒にだった。この後 Motel まで、件のパトカーに「護送」され、やっと解放された。相変わらずまずい昼食の最中、やはり今日も荒天？により午後出帆予定の獨島行遊覧船は欠航とのこと。ここで浦項行の船に乗る崔氏と離別して、私は旅行社の車で鬱陵島南端に位置する사동港を 14:00 に出発するやや小型の船に乗船する。この日は東海も穏やかで波もほとんど無く、獨島行遊覧船の欠航はほんとうかと疑いたくなった。ただ、過去の事例からみて乗船拒否との可能性もおおいにあり得たかななどと夢想しつつ、定刻どおり 17:40 に江原道東海市の号立港に到着した。この港は町外れにあり、taxi も数台しか客待ちしていなく奪い合いの様相。途方に暮れていたところ、“can you speak English?” と天の助けか、英語を話すアジュマ(在米韓国人)が確保した taxi に同乗させてもらい、東海市内の Motel に無事到着。近くの豆習でひさしぶりの新鮮な刺身料理に百歳酒も堪能し、Motel のオンドルパンで熟睡。

翌 21 日(水)朝以降、帰国する 22 日(木)夕方までの旅程は、テーマから外れるので、簡略にする。Korail 東海駅 8:43 発の早궁호 1639 列車で一路서울に向かう。途中 Korail 唯一のスイッチバック区間(過去 2 回通過)があった太白線の新トンネルを通過する。13:36 清涼里駅到着、そこから taxi で教保文庫に向かう。旧知の朴漢龍氏(民族問題研究所)の助言を得て、獨島関係書籍を約 20 冊購入し直ちに EMS で送付。そこから朴氏と taxi に同乗し、서울龍山駅で 17:40 発の새마을 1161 列車に乗車。目的の長項駅～群山駅間の新線鉄橋を通過するも(この瞬間やった！Korail 完乗達成)、写真撮影に追われて下車するはずの群山駅で降りられず、終着の益山駅まで乗越してしまう。しかし携帯電話のおかげ、自家用車で迎えの金晃榮氏(群山大学校)と益山駅で久しぶりの再会を果たす。しかし、もう午後 9 時を過ぎており、車中で夕食をすませていたので、車で群山市内に向かう。金氏が予約してくれた高級 Motel のやはりオンドルパンで寝酒を飲んでまたもや熟睡。翌朝早く金氏の出迎えを受け、1945 年創業という群山でも老舗のパン屋で豪華な朝食。事前に日帝時代の群山関係資料を贈呈したためか、地元名産の太い瓜の漬物など高価なお土産も貰い、群山市外 B T まで見送ってもらう。9:40 発の고승 bus で釜山金海 B T に 13:40 に到着。B T から taxi で金海 A P に向い、同 A P 16:30 発の Air Busan(BX122 便)に搭乗、関西 A P には 17:50 着。往路と同様関空特急「はるか」に乗りたかったのだが、かなり散財したので節約して「関空快速」で自宅の高槻に帰着した。

第 285 回朝鮮近現代史研究会 (2013 年 3 月 10 日)

日本陸軍の大陸政策と朝鮮

一辛亥革命期と第 1 次世界大戦期を中心に一 松田利彦



本報告は、1910 年代前半、日本陸軍の中国大陸侵略政策において、朝鮮がどのような位置を占めたのかを具体的に明らかにすることを目的とする。植民地駐屯軍の対外防衛・治安維持・帝国拡張の機能のうち「帝国拡張」に焦点を当てるものである。

韓国統監として「併合」をなしとげた後、朝鮮総督となった寺内正毅は、1911 年それまで兼任していた陸相を辞任し朝鮮総督専任となる。本来の職制上、朝鮮総督は、陸軍関係の予算・人事には介入できないはずだったが、実際には、寺内は、陸軍長老としての権威と発言力を依然として維持し、陸軍(特に山県閥)による朝鮮支配・大陸進出の核心となった。そして、寺内およびその配下の朝鮮駐軍や朝鮮駐憲兵隊の中堅幹部が、陸軍の利益の代弁者として対中国政策の立案・遂行に関与し、二度にわたり朝鮮駐軍の(幻に終わるが)満洲出兵計画も策定した。

まず、辛亥革命期、1911 年から 12 年にかけて寺内を含む陸軍首脳は、満洲権益の維持・拡大に強

い関心を持ち、そのための兵力の一部として朝鮮駐紮軍を間島方面に動員することを計画した。また、この時期、陸軍内部では、中国（特に満洲）と朝鮮の連関性に対する認識が強化されたが、こうした認識は、朝鮮二個師団増設問題や満韓統一経営機関設置論に関わる陸軍関係者の議論の中にも窺われる。

ついで、1914年から15年にかけても、対華21箇条要求強要を後押しする圧力として、朝鮮駐屯軍を含む動員計画が策定された。このプランを牽引したのは、朝鮮駐紮憲兵隊司令官から参謀本部次長に転任していた明石元二郎だった。明石は、「併合」当時の韓国情勢も想起しながら、満洲駐屯軍・朝鮮駐紮軍などによって袁世凱政権に圧力をかけようとした。また、中朝国境を越えて、在外邦人「保護」の名目による出兵も計画されたが、このとき間島では独立運動家の排除も目されていた。結局この計画も、中国側が21箇条要求を受諾したことで実現しなかった。

いずれの出兵計画も、朝鮮駐紮軍をいわば「後詰め」として満洲方面へ動員しようというものであり、積極的大陸政策が朝鮮統治の安定のためにも要求されるという理由づけがなされていた。このような発想は、有名な満洲事変時の朝鮮軍の越境出兵の原形とも言える。ただし、満洲事変時のように朝鮮総督の裁量を越えた朝鮮駐屯軍の独断的判断は、1910年代にはまだ見られなかった。寺内総督後任の長谷川総督の時期には、中国領の黄柏甸子・琿春への越境出兵（1917年）が起こっているが、朝鮮軍側は朝鮮総督との意思疎通に努めていたことが、朝鮮軍司令官松川利胤の日記からは窺われる。

●青丘文庫研究会のご案内●

■ 第287回朝鮮近現代史研究会

2013年5月12日（日）午後3時～5時

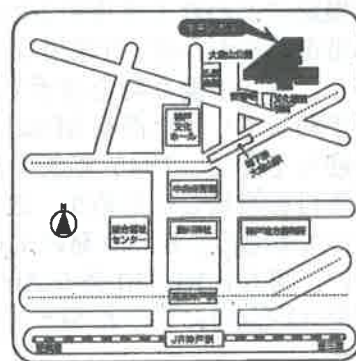
「1990年代以後の韓国女性政策の展開と変貌」

盧 相永

■在日朝鮮人運動史研究会関西支部は、お休みです。

※会場 神戸市立中央図書館内

青丘文庫 TEL 078-371-3351



【今後の研究会の予定】

6月9日（日）近現代史（未定）、在日（塚崎昌之）、研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1～5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

6月号以降は、梶居佳広、中川健一、黒川伊織、砂上昌一、三宅美千子、佐野通夫、吉川絢子、安致源、伊地知紀子、太田修、高正子、坂本悠一、全淑美、足立龍枝、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願いします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

風薫る5月となりました。六甲山の新緑が日に日に鮮やかになっています。会員の方には本号に2013年度の会員証を同封しています。会員は年間3000円の月報購読料が条件です。例外は、学生会員でメールでの案内のみの方です。ご希望の方は飛田 hida@ksyc.jp までメールをお願いします。在日研究会の方は、これと別に年会費5000円で雑誌3冊を得ることができます。在日の日韓合同研究会、8.3～4、東京で開催されます。またかつて青丘文庫で開かれていた日韓キリスト教史研究会と関連の東アジアキリスト教関係市研究会も東京で7.26～27に開かれます。／今年は、関東大震災から90年です。学生センターでは9月3日（火）に山田昭次さんをお招きして朝鮮史セミナーを開きます。（飛田）